

時間的展望に関する一考察

神田 信彦*

A Study on Time Perspectives

Nobuhiko KANDA

問題と目的

過去、現在そして未来について私たちが日頃抱いている意識や態度を対象にした心理学的概念に時間的展望がある。その定義は必ずしも一致しているわけではないが、しばしば参照されるものとして、Frank (1939) や Lewin (1951) による「ある一定の時点における個人の心理的過去と未来についての見解の総体」がある。展望は ‘perspective’ の訳であり、この定義の意味するところは、未来については自己の状態についての見通しや期待の意味であり、過去については、過ぎ去った自己の経験をどう考えるかやどう評価するかという意味を持つと考えられる。それはいずれもある一定の時点、つまり現在から考えてということであり、現在との関係の中で理解されるものである。

定義の問題を始め時間的展望を考えるにあたり幾つかの問題が存在するが、本研究では2つの問題を検討する。1つは過去、現在及び未来の関連性についてのものであり、2つ目は時間的展望の安定性に関するものである。

第1の問題については、過去－現在、現在－未来あるいは過去－現在－未来の関係は私たちの意識の中ではどのようなになっているのであろうか。これらの関係に関する研究が十分に行われていないという指摘がなされている（例えば、白井, 1994; 勝俣, 1995; 奥田, 2002）。勝俣（1995）は時間的展望の定義を試みる中で、時間的展望、過去展望、未来展望及び現在展望をそれぞれ定義し、特に現在展望についてはその中で「過去展望、未来展望との密接な関係を持つ」として、①過去展望も未来展望も含まない現在展望、②過去展望を含む現在展望、③未来展望を含む現在展望、④過去展望と未来展望を統合した現在展望が存在すると指摘している。また、白井（1994）は、白井（1989）の文章完成法を用いた研究結果をもとに、過去、現在及び未来を関連づけながら時間的展望を理解するために「時間的展望体験尺度」を作成している。さらに奥田

* かんた のぶひこ 文教大学人間科学部

(2008)は過去－現在－未来の相対的関係をたずねることによって上記の問題を検討しようと試みている。

白井の尺度は時間的展望を測定する尺度として比較的多くの研究（例えば、谷, 1998; 三宅, 2005; 神田・林, 2006; 奥田, 2008）で用いられている尺度であり。4つの下位因子を持ち、過去については、「過去受容」、現在については「(現在の)充実感」、未来については「目標指向性」及び「希望」で構成されている。未来は2つの側面に分かれているものの、過去、現在、未来が明確に別れた因子構造となっている。さらに白井は「過去受容」と「目標指向性」、「(現在の)充実感」と「目標指向性」以外の組み合わせで有意な弱いあるいは中程度の相関を得ている。つまり過去と現在、過去と希望（未来）、現在と希望（未来）それぞれが強くはないものの一定の関係を持っているということである。これは勝俣や奥田の指摘に符合するものと言えよう。

第2に時間的展望は個人の中でどの程度安定したものなのであろうか。日々、体験する出来事によって変動を受けることが少ないのか、あるいは変動を受けやすいのであろうか。

白井の尺度の「(現在の)充実感」を構成する項目を見ると「毎日の生活が充実している」や「毎日の生活が同じ事の繰り返しで退屈だ」などの内容であり、比較的近い過去を含む現在に対するその人自身の評価に関わっている。これはその人が先の時間範囲で経験する生活上の出来事によって影響を受けると考えられる。つまりその人にとって肯定的な経験は「(現在の)充実感」を高め、その人にとって否定的な経験は「(現在の)充実感」を低下させることが予想される。また、先に示した白井の結果では「過去受容」と「希望」は「(現在の)充実感」と弱い相関があったことを考慮すると、この2つのについては「(現在の)充実感」を介して変動が見られるのではなかろうか。

一方「目標指向性」は「(現在の)充実感」や「過去受容」とは無相関であったが、このことは「目標指向性」は後の2因子とは関連しないということであり、それらの程度が変動した場合にもこれと連動して変動するすることはないか、あるいは変動がないことを示唆するものと考えられる。

本研究では、以下に説明するように大学新入生を対象に2ヶ月の間に3回にわたり時間的展望体験尺度によって時間的展望を測定し、その因子構造を検討することによって過去、現在及び未来の関係の検討を行い、それぞれの因子の関係が白井の得ている結果と同等であるか否かを検討した。また個人内での時間的展望の安定性の検討を行った。

方 法

調査対象

私立B大学の新生で心理学概論の授業の受講生213名（男子85名、女子128名）を対象とした。なお分析にあてた回答数は以下の3回の調査すべてに回答した150名（52名、女子98名）であった。

調査時期と調査方法

調査は3回にわたり実施した。第1回は2006年4月上旬、第2回は5月上旬、さらに第3回を6月上旬の授業時に実施した。下記の項目で構成された質問紙を配布しその場で回答を求め回収した。

質問紙の構成

時間的展望体験尺度

白井（1994）が作成した尺度で 18 項目（表 1, 2, 3）からなり、「現在の充実感」（5 項目）、「目標指向性」（5 項目）、「過去受容」（4 項目）及び「希望」（4 項目）の 4 つの下位尺度を構成している。各項目は 5 件法（本研究では「とてもよくあてはまる」「よくあてはまる」「あてはまる」「少しあてはまる」及び「あてはまらない」）で測定され、各下位尺度は得点が高いほどその傾向が強いことを示す。

結果と考察

過去・現在・将来の関係に関する検討 — 3 回のデータの因子分析結果の比較—

3 回にわたって測定した時間的展望体験尺度を構成する項目を対象にそれぞれ因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。白井（1994）は主因子法、バリマックス回転によって「現在の充実感」「目標指向性」「過去受容」及び「希望」の 4 因子を抽出し、その下位尺度とし内部相関を算出した。「過去受容」と「目標指向性」、「現在の充実感」と「目標指向性」以外の組み合わせで有意な弱いあるいは中程度の相関を得ている。このため本研究では因子間の相関関係を考慮しプロマックス回転を用いた。なお、本研究では逆転項目とされている項目について逆転することなく分析を行った。

表 1 第 1 回（4 月上旬）分の因子分析の結果

	将来（積極 性—消極 性）	現在—将来 （否定—肯 定）	現在（肯定 —否定）	過去（否定 —肯定）	h^2
私にはだいたいの将来の計画がある	.827	.034	.008	.016	.330
私には将来の目標がある	.807	.090	.105	-.024	.543
将来のために考えて今から準備をしている事がある	.730	.158	.186	.025	.498
私の将来は漠然としていてつかみ所がない	-.611	.387	.200	.029	.397
私の将来には希望がもてる	.411	-.083	.302	.022	.464
今の自分は本当の自分ではないような気がする	.184	.606	-.048	.074	.344
毎日が同じ事の繰り返しで退屈だ	.165	.580	-.408	-.057	.656
毎日が何となく過ぎていく	-.059	.579	-.229	-.142	.458
将来のことをあまり考えたくない	-.119	.545	.094	.098	.485
私には未来がないような気がする	-.093	.464	-.130	.250	.654
10年後、私はどうなっているのかよくわからない	-.414	.457	.158	-.029	.680
今の生活に満足している	-.093	-.142	.664	-.039	.491
毎日の生活が充実している	.129	-.079	.616	.052	.689
自分の将来は自分で切り開く自信がある	.236	.087	.475	.023	.312
過去のことはあまり思い出したくない	-.016	-.063	-.034	.845	.522
私の過去は辛いことばかりであった	.105	.205	.055	.600	.521
私は自分の過去を受け入れることができる	.052	.120	.379	-.397	.202
私は過去の出来事にこだわっている	-.091	.208	.074	.299	.400
固有意値	4.035	3.917	2.807	2.259	

表 2 第 2 回 (5 月上旬) の因子分析の結果

	将来 (積極 性—消極 性)	現在—将来 (否定—肯 定)	現在 (肯定 —否定)	過去 (否定 —肯定)	h^2
私にはだいたいの将来の計画がある	.904	.054	-.056	.097	.435
私には将来の目標がある	.713	.093	.216	.037	.474
将来のために考えて今から準備をしている	.711	.175	.109	.031	.672
私の将来には希望がもてる	.651	.012	.247	-.145	.511
自分の将来は自分で切り開く自信がある	.635	.136	-.007	-.104	.411
私の将来は漠然としていてつかみ所がない	-.568	.421	.231	-.073	.389
毎日が同じ事の繰り返しで退屈だ	.032	.721	-.408	-.148	.743
毎日が何となく過ぎていく	.101	.691	-.145	-.094	.370
今の自分は本当の自分ではないような気がする	.128	.690	.015	-.056	.626
私には未来がないような気がする	-.073	.605	-.137	.096	.567
10年後、私はどうなっているのかよくわからない	-.409	.524	.152	-.015	.635
私の過去は辛いことばかりであった	.247	.522	-.002	.226	.588
私は過去の出来事にこだわっている	.215	.415	.051	.310	.751
将来のことをあまり考えたくない	-.346	.373	.238	.224	.372
今の生活に満足している	.021	-.068	.785	-.084	.519
毎日の生活が充実している	.143	-.083	.722	-.026	.625
過去のことはあまり思い出したくない	.074	.077	-.020	.837	.337
私は自分の過去を受け入れることができる	.223	.110	.161	-.583	.615
固有値	4.192	3.995	2.035	2.381	

表 3 第 3 回 (6 月上旬) の因子分析の結果

	将来 (積極 性—消極 性)	現在—将来 (否定—肯 定)	過去 (否定 —肯定)	現在 (肯定 —否定)	h^2
私にはだいたいの将来の計画がある	.900	.144	.058	.046	.402
私には将来の目標がある	.822	.109	.002	-.050	.537
将来のために考えて今から準備をしている	.733	.080	.062	.115	.591
私の将来は漠然としていてつかみ所がない	-.637	.194	.068	.209	.585
私の将来には希望がもてる	.634	.070	.010	.314	.390
自分の将来は自分で切り開く自信がある	.472	-.055	.094	.302	.459
10年後、私はどうなっているのかよくわからない	-.427	.332	.108	.205	.758
毎日が同じ事の繰り返しで退屈だ	.139	.711	-.101	-.221	.562
毎日が何となく過ぎていく	.068	.669	-.061	-.214	.653
今の自分は本当の自分ではないような気がする	.189	.574	.201	-.078	.621
将来のことをあまり考えたくない	-.395	.502	.011	.183	.584
私には未来がないような気がする	-.116	.411	.243	-.131	.497
過去のことはあまり思い出したくない	.038	-.117	.924	-.043	.723
私の過去は辛いことばかりであった	.181	.201	.607	.081	.356
私は自分の過去を受け入れることができる	.172	.148	-.528	.408	.410
私は過去の出来事にこだわっている	-.016	.211	.493	.048	.395
毎日の生活が充実している	.027	-.205	.028	.800	.432
今の生活に満足している	.043	-.204	-.003	.753	.524
固有値	3.838	3.302	2.953	1.858	

3回のデータに関してそれぞれ因子数を4因子、3因子、2因子指定を行い分析した。回転前の累積寄与率、回転後の各因子の因子負荷量の高い項目の構成を検討したところ、いずれの測定回も4因子が適当であると判断した。各回の分析結果を比較すると、因子構造及び各因子を構成する項目はおおむね一致する傾向にあった(表1, 2, 3)。因子構造については第1, 第2因子は各回の分析で共通しており第1因子は「将来(積極性—消極性)」、第2因子は「現在—将来(否定—肯定)」を意味する項目群が高い因子負荷量を示していた。第3因子と第4因子については、第1回と第2回のデータでは一致しており第3因子は「現在(肯定—否定)」、第4因子は「過去(否定—肯定)」を表す項目が高い因子負荷量を示していた。これに対し第3回のデータでは第3因子と第4因子が入れ替わっていた。

白井(1994)が作成した時間的展望体験尺度は、「希望」、「目標指向性」、「現在の充実感」、及び「過去受容」の4因子で構成されている。今回のサンプルではこれとはやや異なる結果を得た。因子数は4と白井の結果と同様であったが、因子構造は必ずしも一致していない。今回の結果では「希望」を構成する項目の一部が「目標指向性」を構成する項目群と一緒に「将来(積極性—消極性)」因子となっている。各分析で2番目に抽出された因子は「現在—将来(否定—肯定)」であった。第2回目のデータの因子分析では過去の否定—肯定に関する2項目も因子負荷量が.4以上の値を示していたがその値は.415及び.522であり、また順位もさほど高くないため第2回の分析で得られた第2因子も「現在—将来(否定—肯定)」とすることとした。(現在の否定的な側面が意識されるときは過去と未来も連動して意識されるということか?)

白井の結果と対応させてみると上記のような相違はあるが、「将来(積極的—消極的)」は「目標指向性」に、「現在(肯定—否定)」は「(現在の)充実感」にそれぞれ概ね対応し、「過去(否定—肯定)」は得点の方向性は逆であるが「過去受容」に第1回と3回のデータについては、因子負荷量が上位の項目は完全に対応している。しかし先に示したように第2回のデータについては、「過去受容」を構成する2項目が「現在—将来(否定—肯定)」に対する因子負荷量で高い値を示していた。「現在—将来(否定—肯定)」は「(現在の)充実感」と「希望」(2回目のデータは「過去受容」)を表す項目が含まれており対応関係を明確にすることはできない。したがって白井が抽出した因子と異なるものを使用していることを明確にするために上記の因子名を本研究に限って使用する。また以降の分析は因子得点によって行った。

表4 各測定回ごとの内部相関(因子相関行列)

	現在—将来(否定—肯定)			現在(肯定—否定)因子			過去(否定—肯定)因子		
	4月	5月	6月	4月	5月	6月	4月	5月	6月
将来(積極性—消極性)	-.602 ***	-.456 ***	-.365 ***	.427 ***	.264 ***	.135	-.203 *	-.219 **	-.145
現在—将来(否定—肯定)				-.465 ***	-.139	.089	.516 ***	.557 ***	.725 ***
現在(肯定—否定)因子							-.303 ***	-.189 *	.080

*** p<.0001; ** p<.001; * p<.01

表4は、各回の因子分析によって得られた因子相関行列である。まず「将来(積極的—消極的)」と他の因子との関係から見ると「現在—将来(否定—肯定)」はいずれも有意な負の関係を

得ているが回を追うごとに中程度の相関から低い相関へと変化していた。「現在（肯定—否定）」とは4月のみ有意で中程度の正の相関が見られ、5月は有意だが弱い正の相関、6月は無相関へと変化していた。「過去（否定—肯定）」とは、4月、5月は有意ではあるが非常に弱い負の相関、6月は無相関であった。これは白井（1994）の結果と一致している。また時間的推移による変化は明確でない。次に「現在—将来（否定—肯定）」と他の因子との関係を見ると、「現在（肯定—否定）」とは、4月だけが有意な中程度の負の相関が見られたが他の2回は無相関であった。「過去（否定—肯定）」とは、4月、5月が有意な中程度の正の相関であり、6月は有意な高い正の相関が見られた。最後に現在（肯定—否定）」と「過去（否定—肯定）」との関係は、4月のみ有意な弱い負の相関が見られた。

これから、計画や目標を中心とする将来展望と過去への評価とは単純に影響し合うことはない可能性を示している。例えば、明確な計画や目標がある（あるいはない）人は過去に対して否定的（あるいは肯定的）であるというような一義的な関係ではないであろうということである。その一方で、将来の見通しに関わる意識を含んだ現在は、過去に対する評価と負の関連を示すとともに、計画や目標を中心とする将来展望とも関連しており現在がそれぞれと関係していることが示されたと言える。しかし同じく現在を示す「現在（肯定—否定）」は異なる結果を示していた。他の時制に関連する現在と関連の弱い現在の違いは何によるのであろうか。例えば部活動やサークル活動あるいはアルバイトに力を注いで「充実感」や「満足感」を経験していても、それらの活動はその人の将来の計画や目標とは直接結びつきにくいことも十分にあり得ると考えられる。それが生活の他の部分には異なる意識を経験していることもあろう。つまりその人が自身の生活のどの部分にあるいはどの役割に注目するかによって現在と未来、現在と過去のつながりが明瞭になったりぼやけたりすると考えられる。今回の結果はこれを反映していると考えられる。

また「将来（積極性—消極性）」が「現在（肯定—否定）」との関係については、調査対象が大学新入生であることを考えあわせる必要があるだろう。4月の測定は入学直後であったので、目標実現過程の節目、つまり最終的な目標の実現へ一段階であり新しい環境への適応こそがそのとき現在の全てであり、またこれが将来の目標へ連動していると意識する調査対象が一定数あったことを示していると考えられる。1、2ヶ月の経過とともに交友関係、部活動やアルバイトなど生活が多様に展開し、上に述べたような段階に至るものと推測される。

「現在—将来（否定—肯定）」が「将来（肯定—否定）」と負の相関を、「過去（否定—肯定）」と正の相関をいずれの月の組み合わせでも示したことは、それらが安定的に関係していることを示すものと言えよう。「現在—将来（否定—肯定）」が将来に対する項目が一定の因子負荷量を示したため、これが「将来（肯定—否定）」との間の関連性に影響したこともあるがそれだけであらうか。現在の自分への否定的な意識が高まるとき、自分の過去の否定的側面だけでなく、将来への志向性が減衰したり断ち切られたような意識が生じてくることを示している可能性もある。

時間的展望の安定性に関する検討

次に各因子ごとに因子得点を4月、5月、6月について各月の組み合わせで積率相関係数を算出した。結果は表5, 6, 7, 8の通りである。第1因子である将来（積極性—消極性）は各月間の相関係数は.70台～.80台と比較的高い値であったのに対し、他の3因子は、.50台～.60台の値が中心であった。

さらに各因子間で4月と6月の間の相関係数に有意な差があるか否かの検定を行ったところ

表 5 将来（積極性—消極性）因子の各月間の相関係数

	4月	5月
5月	.789	—
6月	.724	.819

表 7 現在（肯定—否定）因子の各月間の相関係数

	4月	5月
5月	.525	—
6月	.384	.650

表 6 現在—将来（否定—肯定）因子の各月間の相関係数

	4月	5月
5月	.710	—
6月	.548	.692

表 8 過去（否定—肯定）因子の各月間の相関係数

	4月	5月
5月	.587	—
6月	.557	.602

（表9）、「将来（積極性—消極性）」の4月と6月の相関は、他の3因子の4月と6月の相関より有意に高い値であることが明らかとなった。現在—将来（否定—肯定）と過去（否定—肯定）は現在（肯定—否定）より有意に高い相関係数であることが示された。現在—将来（否定—肯定）と過去（否定—肯定）は相関係数間に有意な差は見られなかった。

「現在（肯定—否定）」因子は2ヶ月の間をおいた相関係数は.384であり、個人内の変動が比較的大きいことを意味していると考えられる。「現在（肯定—否定）」に高い因子負荷量を示した項目は「今の生活に満足している」や「毎日の生活が充実している」であった。これらはそれぞれの回答者にとって一定の過去を含んだ心理的現在の経験への率直な評価あるいは印象をたずねているものと言え、そのため日常の肯定的経験や否定的経験が「現在（肯定—否定）」因子には比較的容易に反映すると考える事ができよう。

表 9 各因子の4月-6月の相関係数の相等性の検定（対応がある場合）

因子の組み合わせ		Z値	有意水準
将来（積極性—消極性）	現在—将来（否定—肯定）	3.484	$p < .0006$
	現在（肯定—否定）	5.409	$p < .0006$
	過去（否定—肯定）	3.077	$p < .0014$
現在—将来（否定—肯定）	現在（肯定—否定）	2.222	$p < .0272$
	過去（否定—肯定）	-0.168	n.s.
現在（肯定—否定）	過去（否定—肯定）	-2.289	$p < 0.022$

その一方で「将来（積極的—消極的）」は.724と比較的高い値を示し他の因子に比較し個人内の変動はあまり大きくなく比較的安定している可能性が示された。つまり、将来の目標、計画あるいは希望を抱く（あるいは抱かない）ことは、通常の経験によって大きな影響を受けることが、他の側面特に「現在（肯定—否定）」に較べ少ないということであり、いったん形成されると多少のトラブルでは変更されない可能性が強い事を示している。

総合的考察

過去、現在及び未来の概念的区分と私たちの体験するものとは必ずしも一致しない可能性が示された。それは同一の対象による3回の調査によって同じように確認された。

本研究の結果を「現在」を起点にして捉える場合、因子分析の結果から勝俣（1995）の指摘した過去展望も未来展望も含まない現在展望（「現在（肯定—否定）」）、未来展望を含む現在展望（現在—将来（否定—肯定）」が存在する可能性が示されたと言えよう。過去展望を含む現在展望は因子としては得られなかった。その一方で因子間の相関が現在—将来（否定—肯定）」と「過去（否定—肯定）」の間に見られた。これは過去展望を含むというよりも相関関係ではあるが仮に現在を起点とする場合、現在が過去展望を活性化するととらえることができよう。ただし、過去展望と未来展望を統合した現在展望に対応を示唆する結果は見られなかった。

時間的展望の個人内の変動については、相関係数による分析から「将来（肯定—否定）」は他に比較し安定している可能性が示された。その一方で「現在（肯定—否定）」が他の因子に較べ大きい変動がある可能性が示された。後者と「現在—将来（否定—肯定）」に高い因子負荷量を示した項目は白井（1994）の「（現在の）充実感」を構成する項目であるが、これらは異なる視点からみれば、それぞれの人の適応感あるいは自己不確実感を尋ねる内容であると言える。ここまで私たちそれぞれにとっての「現在」を時間的展望の枠組みの中で捉えてきたが、もし適応感あるいは不適応感によって代表されるものと同一であるとすれば、時間的展望における「現在」の重要性は変わらないものの、また「現在展望」を前に肯定的に考察したものの、現在展望という語が適切であるかどうか疑問となる。

ただし、これらの結果及び考察は、「時間的展望体験尺度」を構成する18項目のみを対象にした検討結果であるためその扱いには慎重でなければならず、他の測定方法による検討も含めた研究が求められる。

引用文献

- Frank, L. K. 1939 Time perspective, *Journal of Social Philosophy*, 4, 293-312（Lewin, 1951からの引用）
- 勝俣暎史 1995 時間的展望の概念と構造 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 44, 307-318.
- 神田信彦・林潔 2006 大学生の抑うつ傾向—自己注目及び時間的展望との関係— 応用心理学研究, 31, 113-122.
- Lewin, K. 1951 *Field theory in social science : Selected theoretical papers*. New York: Harper & Brothers.（猪股 佐登留訳 1956 社会科学における場の理論 誠心書房）
- 奥田雄一郎 2008 大学生の時間的展望の構造に関する研究：過去・現在・未来の満足度の相対的關係に着目して 共愛学園前橋国際大学論集, 8, 13-21.
- 白井利明 1989 現代青年の時間的展望の構造（1）—大学生と専門学校生を対象に— 大阪教育大学教育紀要（第IV部門）, 38, 21-28.
- 白井利明 1994 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, 65, 54-60.
- 谷冬彦 1998 青年期における基本的信頼感と時間的展望 発達心理学研究, 9, 35-44.
- 三宅俊治 2005 不安に及ぼす身体不調感と将来展望の影響：若年・中年・高齢者の比較 心身医学, 45, 923-932.